

得ると云ふものは、容器の大なる時に、之を然る

べき蒲團の上に置き、間に綿か、枯草か、毛布の

小切れかを詰めたる張り籠をもて重ねて、蔽ふ

と云ふことが輕便であるちしく思はるゝのである

併しことに困ることには、吾輩の如き三人か四人暮しの家庭では、無暗に大なる器にて物を煮ると云ふ

ことも出来ぬので、何んとかして器が小さくても、

極端に小さくては無論蛇目であるが………十分に出

来てそれで手數が簡便な方法はあるまいか、小家庭に實行して便利な方法はあるまいか、と云ふことを疑問として残つたのである、此疑問の解答案として案出せられたるものは、次の方法であつた。

(未完)



おはなし

筑紫の嫗

一、鸚鵡

或老人が二三種の詞を話す鸚鵡を一羽持つて居ました。主人がお前は何處に」言ふと、鳥は「私は此所に」と言ふ事ができましたところが隣の家の息子は之をおもしろがつていつも見に来では遊んで居るのでしたが、或日いつもの様に來て見ると老人は丁度不在です。それでふとした出來心で鳥を盗んで懷にいれてそつと歸らうとするところに老人が歸つて来まして。そして鳥の居ない事には気がつかないで、いつもの様に隣家の息子をよろこばせるつもりでいきなり、「お前は何所か」と話しかけました。すると鳥は一生懸命の聲で、「私は此所に」と泥棒の懷の中で叫びました。

三、無上の寶

ローマのゴルネリーといふ婦人は二人の息子をもつてよく注意して教育して居ましたから、二人共小さな時から中々立派な氣質で良い人間でありけした。或日或婦人がゴルネリーの家を訪ひまして話の席には自分の飾つて居る寶石を示しまして。今にゴルネリーからも見せるであらうと思つて待つて居りました。そうするとゴルネリーは丁度今學校から歸つて來た二人の子を呼びまして、婦人に示して「私の最も良き最も貴き寶は、これでござります」と言ひました。